



詩とメルヘン絵本館開館25周年記念 特別企画 詩人・朗読家 詩村あかね インタビュー



詩とメルヘン絵本館開館 25 周年・雑誌『詩とメルヘン』創刊 50 周年を記念して、4 号に分けて詩人・朗読家の詩村あかねさんと、イラストレーターの内田新哉さんに、インタビューと詩とイラストの特別かき下ろしを寄稿していただきます。

第 1 弾となる今号では、第 16 回詩とメルヘン賞を受賞した詩村あかねさんにインタビューを行いました。

Q1. 『詩とメルヘン』との出会いについて

中学 3 年時の担任 Y 先生（当時 26 歳の現代国語担当男性教諭）。Y 先生は『詩とメルヘン』愛読者で新刊からバックナンバーすべてを学級文庫に置いてくれました。教室で初めて『詩とメルヘン』を開いた時の興奮を思い出します。誌面が贅沢で美しく、「いつか、この雑誌の住人になりたい！」と憧れを抱いて熱心に読みました。その時 Y 先生も詩を書かれていたのかもしれませんが。現国の時間に詩作の課題を出し、生徒全員の詩を教室内に掲示していました。当時は家庭訪問で担任教諭に自室を見せなければいけなかったのですが、その時、それまで書きためていた詩のノートを先生に見せました。先生は読んだあと「君は詩を書いて人生を送る人になるね」と言ってくれました。『詩とメルヘン』との出会いを下さった先生は忘れがたい人です。〈詩村あかね〉という筆名は「詩を愛する人が住む村の夕暮れ」という風景を想って、この時期に思いつきました（恥ずかしいほど乙女チックですが…笑）。

Q2. 「詩とメルヘン賞」受賞の思い出について

賞を頂いたのは投稿し始めて 7 年目です。当時から自分は天才タイプではないとの自覚があり（笑）毎月欠かさず投稿し続けていたので、努力賞を頂いたのだと受け止めました。授賞式で「あかねさんの続ける力を讃えたい」とやなせ先生が仰ってください、感謝と感激で涙が溢れました。当時私は結婚 2 年目。お腹に命を宿したばかりでした。ずっと私の詩を読んできて下さった先生から「少女だったあかねさんがお母さんになる。よい詩を書こうとするより、よい人生を目指せばいい。そしたら自然にいい詩が書ける」とのお言葉を頂いたのを覚えています。

人生も後半になりましたが、今も「よい人生」の意味を考え、その時々で自分を振り返りながら詩を書いています。

Q3. やなせたかし名誉館長からは「天性のリズム」と称されていますが、 詩を書くときに意識していることは？

リズムに関して自覚はないのですが、身体的な詩だとよく言われます。幼い頃から歌うことも好きでしたから自然にそうなったのかもしれませんが。これも身体的な表現ですが、30 代では「飛行機の離陸」をイメージしていました。リアルな場所からフツと別の空間に浮き上がり上昇する感じです。満足するものが書けると「うまく飛べた！」って（笑）。その後は「普遍性」でしょうか。年齢を重ねて「詩の広さ」を意識するようになりましたね。ごく最近、読んで下さる人を良い意味で裏切っていくみたいなあ…なんてことも考えています。「ああ、あかねさんの詩だね」と言って頂くより、「これがあかねさんの詩なの？」って（笑）。

Q4. 詩村さんにとって詩とはどのような存在ですか

学生時代は日記のような感覚でした。詩にすることで楽になっていたんです。その後はずっと感謝の対象ですね。詩は数え切れないほどの喜びや機会、素敵なお人との出会いをもたらしてくれました。初期の「自分が書く」という感覚から「書かせてもらっている」という感覚にどんどん変わっていきました。

詩がなかったら私の人生は今よりずっとシンプルなものになっていたらと思う。共白髪の夫婦のような関係で、最期まで詩と仲良く歩いていきたいですね。

背高泡立草

川辺に青あらし
ゆったりと流れては
一面に眩しい背高泡立草が
鉄橋の下まで倒れゆく
あの時あなたは
すっとした学生で
繊細な指先で缶ジュースを
パシュと一気にあげ
はがれたアルミの小さな蓋を
雑草の群生する土手下へ
無造作に投げ捨てたりした
時には
土手下の急斜面の途中で
綺麗な倒立前転をきめて見せ
子供のように微笑った
わたしと言えば
倒立はおろか自転車にも乗れぬ
女子高生で
かろやかなあなたのしぐさを
どんなにか愛した
時が川面の上だけを流れてゆくのなら
あなたの背ほどもあった
背高泡立草の中へ

ふたりで倒れてゆけばよかった
なぜあの時
わたしは秘密をつくらなかったろう
波打つ背高泡立草は
揺れていたのに
あれから
花粉をとばし
季節だけを数えて
とろとろと川は流れ続けた
あなたはもうここにはいない
野焼きのすんだ土手下に
かなわぬ憧憬が
ぼんやりと浮かぶ

やなせ・たかし評

「背高泡立草」を読んだ時、ぼくは唖った。最初のかきだしから絵のような風景が見えてくる。そしていくらか、おびえがちな少女のほろにがい後悔が波うつ背高泡立草の群生の中にくっきりとかびあがってくる。（『詩とメルヘン』1991年3月号より）



「背高泡立草」（初掲載時の絵は黒井健さん）
（『詩とメルヘン』昭和61年7月号）

Q5. 「背高泡立草」について

当時（珍しく書けた）自信作で「きっと掲載してもらえる！」と信じていました。ですが、いつまで待っても掲載通知は来ず。だいふ月日が経ってから通知を頂いて驚いたのです。やなせ先生がとても気に入って下さって「机の中にしまったままだった」と後で知りました。あまりに嬉しいエピソードでしたからよく覚えています。「詩とメルヘン」読者の方々からもたくさんのお手紙を頂きました。それまで書くものに自信が持てなかった自分を奮い立たせてくれた一篇です。

Q6. 最近のお仕事や今後の活動について

2021 年資生堂様が運営する WEB 版『花椿』〈第 4 回・心にのこった詩はどの詩ですか？〉において読者投票で拙作「眼」が 1 位を獲得。2022 年秋、『花椿』誌 No.830 に「アップデート」を掲載して頂いた後、2023 年、モトウラ生理奈さん（朗読）蓮沼執太さん（曲）とのコラボレーション企画として Podcast 音声コンテンツ「花椿と、詩」で 2 回に分けて自作詩 6 篇を配信して頂きました。

<https://hanatsubaki.shiseido.com/jp/poem/21071/>（前編）

<https://hanatsubaki.shiseido.com/jp/poem/21385/>（後編）

2023 年春、雑誌『たびぼえ』にて最優秀賞受賞。

朗読活動としては東京で毎月開催している「朗読サロン・うたの樹」があります。2023 年末から 2024 年夏にかけて「ベルネザール・わたなべ音楽堂」（東京都）で音楽家の方とのコラボレーションによる朗読コンサートを予定しています。

詩村さんの詳細なプロフィールは p.3 をご覧ください。